

令和元年度 奈良市立帯解こども園 研究実践概要

園長名 大西 三千代

全園児数 133名

1. 研究主題 「豊かな心を持ち、意欲的に活動する子どもの育成を目指して」
～やってみたい 楽しい おもしろいと思える遊びの環境構成と援助～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

日々の遊びや生活の中で、困ったことがあるとすぐに保育者にこたえを求めたり、支持を待たずする子どもの姿が多い。子どもが主体的に遊びと関わり、新たに創り出したり展開したりしていくためには、心を動かされる経験を積み重ねていくことが重要だと考える。その経験を十分に積むためには、日々の遊びの中で保育者の援助や環境構成の工夫が必要不可欠であることから、この主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが「やってみたい 楽しい おもしろい」と思い、遊び込むことができるような保育者の援助や環境構成について考える。

②研究の重点

- ・研究主題について、職員相互の共通理解を図り、具体的な取り組みの方法を探る。
- ・意欲的に生活や遊びを進めるために、子どもの遊びを見取り、それに応じた環境構成と援助のあり方を工夫する。

③活動の方法

(環境構成 援助 心が動いた瞬間(やってみたい・楽しい・おもしろい))

【0歳児】8月 「やってみようかな」 A児(1歳0カ月)

ねらい：水を触って、水の冷たさや気持ち良さを感じる。

廊下に水の入ったタライを2個用意し、水遊びをした。タライの中には、カップやペットボトルシャワー、スポンジなど様々な素材の玩具を入れ、子どもが水を使ってしたい遊びができるように環境をつくった。A児はタライの前に座り、B児が水を勢いよく触ったり、カップに水を入れて流したりする姿を見ている。A児は水に興味をもっているようだが、なかなか触ることができないでいた。そこで、保育者が水を触りながら「お水、気持ちいいよ」「(ペットボトルシャワーをしながら)お水がジャーって出てるね」などと、A児が水を触ってみようと思うきっかけになるような声かけをした。B児は水が好きなので、A児と同じタライで水を勢いよく触っており、A児は触ってみたい気持ちはあるが、不安そうな顔をしていた。そこで、保育者はA児を隣の誰も使っていないタライの方へ誘い、A児が安心して水を触ることができる環境をつくった。すると、保育者がペットボトルシャワーで水を流しているところに手を伸ばし、水を触って「にこっ」と笑顔を見せた。保育者は「お水、気持ちいいね」とA児の気持ちを言葉にかえて共感した。その後、A児は水の気持ち良さに気付き、水の感触を味わったり、カップを使って遊んだりして、水遊びを楽しむ姿が見られた。

<評価>

- ・A児は水に興味をもち、B児が水遊びをしている姿を見ながらも、なかなか水を触れないでいた。保育者は、安心してA児が水を触ることができる環境をつくり、近くで言葉かけをしながら一緒に遊ぶことで、A児も水の感触を味わいながら水遊びをすることができた。

【1歳児】12月 「いっぱい入れたい」 A児(2歳1か月)

ねらい：したい遊びを見つけて、十分楽しむ。

ボールを転がしたり、投げたり、ゴールに入れたりして遊べるように、ボール数個と小さいバスケットゴールを置いていた。

A児は、ボールを手に取り、ゴールに入れて遊び始めた。A児は、ボールがゴールに入ると「できた！」と嬉しそうに保育者に伝え、保育者も「すごいね！入った！」と本児の嬉しい気持ちに共感した。A児は、ボールをゴールに入れた後、転がっていったボールを追いかけ取りに行き、再び入れていた。3回ほど繰り返してやっていたが、そのうちにボールを取りに行ったまま他の遊びを楽しんでいた。

少しして、A児が再びボール遊びに戻ってきたので、保育者が、ゴールに入り落ちてきたボールが中に入るように、ゴールの下に箱を置き、ボールを入れた。A児は、ボールが箱に入ったのを見ると嬉しそうに笑いながら、ボールを取りに行きゴールに入れた。ボールがゴールを通り、箱に入ると「わあ！できた！」と笑いながら保育者の方を見た。保育者が「やったね！入ったね！」と応えると、A児は、もう一度ボールを手に取り、ゴールに入れた。その後も、それを何度も繰り返して遊んでいた。

数日後、園庭に出た時に、バスケットゴールと、その近くに置いてあるボールと箱を見つけ、A児は、自分で箱をゴールの下まで持って来て、同じように遊び始めていた。

<評価>

- ・ゴールの下に箱を置いて、保育者がボールを入れて見せたことで、A児は、興味をもち、自分もやってみたくて、保育者と同じようにボールをゴールに入れて遊び始めた。箱を置くことで、ボールが箱に溜まる面白さを感じたり、拾ってすぐに繰り返し遊んだりすることができた。また、A児の楽しんでいる気持ちに共感することで、もっとやりたいと繰り返し遊ぶ姿につながった。

【2歳児】9月 「焼けたよー！」 A児（3歳4カ月）

ねらい：保育者や友達と一緒に、見立てやつもり遊びを楽しむ。

地蔵祭りや夏祭り、花火、バーベキューなど、自分が経験したことをままごと遊びの中でイメージを持ちながら遊んでいる。A児は、ペタペタブロックでチャッカマンをつくり、つくり方を友達にも教えてあげている。子ども達が興味をもって見立てやつもり遊びを楽しめるように網とコンロをままごとコーナーに置いておくと、B児・C児が布を肉や野菜に見立て並べて焼こうとしていた。その二人の姿を見たA児が側に来て、チャッカマンに見立てたブロックで「あっ、火つけるでー」と言いながら、網の隙間にチャッカマンに見立てたブロックの先を差し込み「カチャ」と火をつける真似をする。B児・C児がA児の動きを見つめる。保育者がA児に「チャッカマン持って来てくれたの」「焼けたかな？」と聞くと、A児「焼けたでー」「熱いでー」とこたえた。A児・B児・C児は、ままごとコーナーの棚からトングやお皿を持って来て、トングでひっくり返したり、お皿に盛り付けたりして遊んでいる。そのうちに、C児が部屋に飾ってあるイガつきの栗を持って来て、網の上に乗せて焼き始めた。A児もイガや栗を焼き、トングで挟もうとするが、栗はつるつる滑るため、挟み方をいろいろ変えながら、ひっくり返したりお皿に乗せたりしている。B児・C児は机にお皿を運び食べたり、他の友達に配ったりしている中、A児は焼くことを繰り返し、食べ終わったB児に「はい、焼けたよ」とお皿を渡すなど、友達とやりとりをする姿が見られた。

<評価>

- ・ペタペタブロックで遊んでいたA児が、近くでバーベキューをしていた友達や保育者の遊びに興味を持ち、自ら一緒に遊ぼうという気持ちにつながった。
- ・季節の自然物を部屋に置いたり、身近な人や経験したことを再現して遊ぶことができるようままごと、バーベキューごっこの環境構成を整えたことで、イメージも広がり、保育者や友達の遊びを見たり、まねたりしながら見立て、つもり遊びや友達と遊ぶ楽しさを味わうことができた。また、保育者が子ども達のイメージしていることに共感し、必要に応じて仲立ちし、声掛けしていく大切さを感じた。

【3歳児】11月 「先生、ドングリ走るとこつころう」

ねらい：身近にある秋の自然物を使って遊ぶことを楽しむ。

保育者や友達と一緒に楽しんでいるいろいろな遊びをする。

砂場でドングリや木の実を使ってごちそう作りをしているA児が4歳児の遊んでいる様子に気付いた。

4歳児はトイやビールケースなどを使ってドングリを転がしている。「わあー」と声が聞こ

えると A 児や砂場にいた子ども達はその声に気付き、年中児が遊んでいる方を見る。「お兄ちゃん達、何しているのかな」と保育者も子どもの気付きに共感し姿を見守る。更に大きな声がしたので遊んでいる方に行き少し離れた所から年中児の遊びを見ている。「お兄ちゃん達遊んでいる所に行ってみる？」と声をかけたが A 児は「いい」と言い、「先生、ドングリ走るとこ作ろう」と砂場からドングリを1つ持ってくる。「お兄ちゃん達、茶色い長い物使ってるね。どこにあるか聞きに行こうか」と誘い、年中児と関わりが持てるようにする。年中児の B 児が「トイ？あそこにあるで」と教えてくれる。A 児がトイを築山の上の方に置いてドングリを転がそうとするが、手を離すとトイが滑り落ちてしまう。「先生、これ持っていて」と言っただけで A 児が転がしている。「先生もドングリ転がしたいな」と言うと、A 児が代わってトイを持つ。トイを置く場所を変えてトイが固定される方法に気付いてほしいと思ひ、「A くんが滑っていたお山の方でドングリ転がしてみる？」と芝生の方に誘う。芝生の方にトイを置くことで芝生を止めてあるペグに引っかかり、トイが固定された。「先生、止まったな」と言ってドングリを転がす。C 児がやってきて1つずつドングリを持って転がしている。交代でドングリを転がしているうちに C 児が転がってきたドングリを取り、A 児に渡したりまたその役割を交代したりして楽しんでた。

<評価>

- ・年中児の遊びに気付き、「あんな風にしてみたい」という遊びへの興味を捉え、思いを受け止めたことでドングリ転がしの遊びへのきっかけをつくることができた。
- ・保育者と一緒に遊ぶ中で遊びに興味を持った C 児の姿を見守ることで遊びを共有することができた。また、ドングリがトイを転がっていったり、トイから土や芝生に移ったりした時の転がる様子にも興味を持つことができた。

【4歳児】 5～6月 「取ったらこのつゆに入れて食べてな」

ねらい：気の合う友達と一緒に、好きな遊びを繰り返し遊ぶことを楽しむ。

保育室で、白い紐をそうめんに見立て、筒の中に入れてそうめん流しをして遊んでいた。しかし、水がないためうまく流れず、園庭で水を使ってそうめん流しをすることにした。たくさん流したいという思いから、紐ではなくスズランテープを割いて麺をつくった。園庭でトイを長くつなげ、そうめんを流す人と取る人に分かれてそうめん流しを始めた。「やった一、とれた」と言ってそうめんを取れたことを喜び、何度も流して取ることをくり返し遊んでいた。そうめんを取ることを楽しんではいたが、取ったものはそのまま持ち歩いてきたため、取ったそうめんを入れる場所が必要ではないかと考え、「これ使ったら？」と声をかけ、近くに椀を用意した。すると、その椀の中に水を入れ、少し砂を入れてかき混ぜた。「これは何？どうするの？」と子どもに聞くと、「これつゆやで。取ったらここに入れて。」と言って保育者や友達につゆの入った椀を渡した。

しばらく、そうめん流しをくり返し遊んでいたが遊びの振り返りの中で、もっとお客さん呼びたい、そうめん流し屋さんをしたい、という話になった。必要な物を子どもと話し合う中で、机と椅子がいるという意見が出た。そのため、遊びの場の側に、机や椅子、トイ、ビールケース、水を溜めたタライなどすぐに遊び始められるように用意した。次の日、園庭に出るとすぐにビールケースとトイを組み合わせてそうめんを流すところをつくり、近くに机や椅子を並べた。机の上にはたくさんのつゆが入った椀と、箸やフォークを用意し、「つゆなくなったらこれ入れてな」と言ってやかんの中におかわりのつゆを用意していた。「いらっしゃいませー、そうめん流しに来てください」と言ってお客さん呼びに行き、お客さんが来てくれると、「はい、これつゆやからここに入れて食べてな」と説明して、椀と箸を渡していた。3歳児がお客さんになってきてくれた時は、初めは箸を渡したが、「フォークの方が良い？」と聞いて、フォークを渡していた。何人もお客さんがいる時は、上の方が全部取ってしまい、下の方がなかなか取れなかったため、「もっと早く流してみたら？」と子どもに声をかけると、トイの角度を急にしたり、勢いよく水を流したりしてそうめん流しを楽しんでいた。

<評価>

- ・椀を用意したことで、そうめんを流したり取ったりするだけでなく、麺つゆをつくるという発想が生まれ、お客さん呼びたい、お店屋さんになりたいという気持ちにつながった。
- ・そうめん流しを繰り返し遊ぶことで、お店屋さんになりたいという思いが生まれ、お客さんと呼ぶために必要なものを考えたり、3歳児にあったフォークを用意したり、考えたことを言葉で伝えたりすることができた。お店屋さんをすることを楽しんでいる子どもや、

流す角度や速さなどそうめんを流すことを楽しんでいる子どもなど様々だが、それぞれが考えたことを自分なりに試しながら遊ぶことが出来た。

【5歳児】 10月 「郵便屋さんです」

ねらい:共通の目的をもった友達と考えを出し合いながら、遊びを進めていく。

手紙や切手の形や文字に興味をもち取り入れて遊ぶ。

A 児「〇〇くんの手紙かいたから、ポストに入れるねん」と、保育者と一緒にポストをつくる材料を探していると、倉庫にあった郵便ポストが見つかり郵便ごっこが始まった。その日は、手紙をかいてポストに入れるだけだったため、遊びの話し合い時に、保育者が「みんなのお家に届く手紙ってどんな形かな？どんな色かな？」と尋ねた。「ハガキが届く」「なんか四角い小さいやつ貼ってある」「それ切手っていうねんで」「あと封筒に入ってる」「ハンコも押してある」などと家に届く手紙を思い出しながらこたえている。切手という言葉聞いた B 児が「切手つくらなあかんやん。明日つくらな」と隣にいた C 児・D 児と話をする。保育者は、子どもたちの反応を受け止めながら、B 児の切手づくりに賛成し、「何かいるものあるかな？切手ってどんな形だろう？」と尋ねる。B 児「白い画用紙をきったらええねん！ほんで、なんかスタンプみたいなやつ押すねん」、E 児「周りがギザギザしてて、四角い！」とこたえる。C 児「なんかギザギザのハサミ使ったらいい」と必要なものを話し合った。翌日、昨日子どもたちと話し合ったもの、白い画用紙、ギザギザハサミ、小さなスタンプ台(水色、ピンク、黄緑)を出しておく。子どもたちは登園すると、早速つくり始めた。F 児がギザギザハサミで白い画用紙を四角に切り、B 児が、A 児が切ったものにスタンプを押している。そこに C 児「入れて」とやってくると B 児「C ちゃん一緒にここにスタンプ押して」と声をかける。すると、B 児「なんかここにシール貼ったら切手みたいになるやん」と B 児の思いを受け止めながら保育者と教材庫にシールを探しに行く。B 児がシールを持って戻ってきたところに、D 児「入れて」とやってきた。B 児「D ちゃんもここにスタンプ押して、僕その上からシール貼るから」と役割分担をしながら遊びを進めていた。

<評価>

- ・子どもたちが共通のイメージを持てるように、形や大きさなどを話し合い、イメージしたものがつくれるよう、必要な素材や用具と一緒に考えたことで、遊びの意欲に繋がった。
- ・“切手をつくる”という共通の目的があったこと、イメージが友達と共有されていたことで、友達同士でしてほしいことを伝え合い、自然と役割分担をしながら熱心に切手づくりに取り組むことができた。

5. 研究の成果

- 乳児は、一番身近な保育者の存在が、遊びを見つけていく中で重要だということがわかった。側で保育者が見守り安心できる場所があることで、「やってみよう・やってみよう」と自ら遊び、「楽しい」という気持ちが表れる。さらに、子どもの思いや気持ちを代弁したり共感したりして受け止めることで、保育者や友達の姿を真似たり、関わったりして一緒に遊びを楽しむ姿に繋がっていくと考える。
- 幼児が心を動かす場面は一人一人により感じ方に違いがあることを留意し、日常生活の中で心を動かしているヒトやモノ、コトとの出会いを見逃さず、発見や驚きに共感していくことが大切であると感じた。何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、また何に行き詰まっているのかなど子どもの姿を捉え、「やってみよう」「楽しい」と味わる環境を整えることが必要であることが分かった。
- 年齢や発達に応じた環境を整えた上で、子どもの心が動かされた瞬間を見逃さず、保育者が先導して環境を整えたり、子どもと一緒に遊びの場をつくったりするなど、場の再構成をしていく。その中で、保育者が子どもに何を経験してほしいのかなど、意図をもって環境構成を行うことが大切と感じた。

6. 今後の課題

- 子どもの生活実態や生活の流れを理解し、さりげなくそれらを環境として構成したり、出会いの機会をつくったりし、「やってみよう」という意欲や「楽しい」という充実感を味わえ、幼児が自分から思わず関わりたくなる環境構成や保育者の援助をさらに追及していきたい。
- 保育者間で子どもの興味関心や遊びの中で心が動いた瞬間について共有し、遊びや保育内容の充実を努め、子どもの遊びの意欲を高めていきたい。